心理臨床における非言語的な〈動き〉の意味について

佐藤　映

１．はじめに　−非言語的な動きへの着眼−

心理療法の過程を検討する際には，言語・非言語を問わず，クライエントが表現したものの意味内容が問題とされることが中心である。語られた言葉や，描かれた描画，作られた箱庭など，面接で得られた情報が事後的に検討され，その象徴的意味や変化が検討の中心となる。しかしながら，それらが面接の場のその瞬間に，どのような響きで，勢いで表現されたのか，という，表現の時間的変化や動きが，クライエントの在り方や体験とどのような関わりをもつのかということに関しても，クライエントを理解し，心理療法の過程や効果を知る手がかりとなりうる。Sullivan（1954/1986）は，精神医学的面接は言語的（verbal）ではなく“優れて音声的（vocal）なコミュニケーションの場である”と述べ，クライエントの非言語的な動きを重要視した。また神田橋（1990）は，対話精神療法において“語られるコトバ”の前言語的要素が，言語的な意味内容とは異なる情動状態や生体機能といった情報を伝えるとした。クライエントの中には，充分な間をとってのんびり語る人もいれば，怒濤の勢いで抑揚なく語る人もいる。また突然速度を上げたり，ゆったり語ったりする瞬間もある。表現行為の時間進行に伴う非言語的な動きの有り様は，その人の持つどのような側面を表しているのか，それは面接の場でのどのような体験や状況から生じるものであるのか，ということは，心理臨床の場の「今，ここ」における一回限りの表現であり，これを探求することは事例検討にも取り上げられにくい心理臨床の瞬間を捉えるという意味において重要なことであろう。

表現の瞬間的過程は言語化できず，視覚化もできず，そもそも意識化することさえ稀な，常に流れ去る刹那的なものである上に，多様な要因に影響を受けていると考えられ，扱うことは非常に困難である。従来の事例研究で取り上げられる表現は，読者と共有されねばならないという要請上，静的なものとならざるを得ないが，筆者は心理療法の本質はむしろ面接場面での動的なやりとりにあるのではないかと考えている。加えて，心理療法の事例検討において，言語活動や非言語活動の「内容」が扱われるのは，それが客観的なものとして記述されうるからである。心理臨床の過程について検討するためには，それが他者と共有できる形で提示される必要がある。しかしながら心理臨床の本質は，他者とは共有され得ない面接の瞬間の体験ではないか。確かに面接における行為の非言語的動きは，倫理的問題を捨象したとしても，録音や録画によって共有可能かもしれない。しかしそれは物理的な変化にすぎないどころか，既に事後的に捉えられたものであり，面接の“生の”瞬間の体験ではない。事例検討が心理療法のプ

ロセスや効果，その後の発展を考える事例研究へとつながっていくことに鑑みれば，今後問題として扱って行かねばならないのは言語／非言語表現の内容に加え，その瞬間的なプロセスの動きではないかと考える。

そこで本稿では，関連する先行研究から非言語的な動きの定義を明確にし，心理学的な概念や心理療法における役割を確認することによって，動きは臨床心理面接においてどのように扱われるべきなのか，その意義と限界について考察することを目的とする。はじめに，行為過程における非言語的な動きはこれまで如何なるものとして扱われてきたのかを検討することによって，心理臨床における動きの定義と性質を明確化する。その上で，動きの背後にある心理学的諸概念について考え，面接の場において動きが如何なる心理学的表象と結びつき機能しているのかについて考える。さらに，心理療法という場を考えるとき，動きは人間の生の如何なる側面を表現し，またそれが心理療法との関連でどのように機能しうるのかについて述べ，動きに着眼することの心理臨床的意義と限界について考察する。

２．行為における非言語的な〈動き〉

心理臨床の場でクライエントが表現するものは，言語表現，非言語表現，行動，態度など実に多様である。これらすべての表現の過程に，非言語的な動きが付随している。言語表現には，その音声的性質，間合いがあり，非言語表現には，描画の筆跡や身振り手振りの勢いやリズム，箱庭で砂を触る際の手の動きなどがあり，行動であれば，カバンを空ける動作の滑らかさ，澱み具合などがあるだろう。また存在しているだけで何も行為していない場合でも，どのような態度でそこにいるのかという“たたずまい”としての動きもある。現実の言語／前言語表現や行為・行動には，必ずその人の，その場における身体的態度が含まれている。この意味で，非言語的な動きは，その身体の動きを客観的に捉えると，あらゆる行為に付随する「個」の時間態勢であると言えるだろう。ここで「前言語表現」と「非言語的な動き」は区別しておく必要がある。前言語表現とは，言語表現と対置させ，他者に何か伝える意図がある行為，つまり言葉を話すことや身振り手振りが含まれている。これに対して「非言語的な動き」という時は，そのような言語／前言語的表現行為の過程に伴う音声や身振りの勢いなどの輪郭を指している。神田橋（1990）の言うように，“非”言語という言い方は，言語にあらずということで，言語以外のすべてを含み込む消極的な言い方である。本稿ではこれを明確に，表現行為の過程に付随する言葉にならないものの意味で用いる。

近年の精神分析的間主観性学派では，面接におけるクライエントの変化プロセスを明らかにする為に，“解釈を越えた何か”を考える必要性が指摘されている（BCPSG,2010/2011）。ここでは，面接においては解釈や言語化されたものに代表される“判然としたプロセス”と，そうではない，二者に気付かれていない“暗黙のプロセス”があることを指摘し，この暗黙のプロセスにおいて何が起こっているのかを，瞬間の非言語的な過程をもとに検討しようと試みている。つまり面接において言語化された内容を越えた非言語的な動きが重要であるという考えのもとに様々な研究が行われており，この源流には乳幼児精神医学や発達心理学の知見が援用されている。Stern（2004/2007）によれば，暗黙のプロセスにおいてはクライエントにとっての過去

の体験から形成された，対人関係の持ち方についての暗黙知である“関係性をめぐる暗黙知 implicit relational knowledge”が，その個人の“他者と共に在るあり方”を形成しているという。また Stern（2004/2007）は，面接のプロセスにおいて刻一刻と進む時間の単位を“現在のモーメント”と呼び，そのモーメントの有り様の変化からクライエントの変化プロセスを読みとろうと試みた。これらは，面接の瞬間の非言語的な動きや，それにまつわる面接の場の雰囲気（“共に在るあり方”）を，クライエントとセラピストの二者のやりとりから可能な限り客観的に捉えようとするアプローチであると言える。

そのような瞬間の営みとして捉えられる非言語的な動きは，心理臨床における身体を媒介とした時間的表現と捉えられる時，動きが付随する表現過程の内実を区別する必要がある。森岡（2004）は，心理臨床の次元で考えられた身体の動作を運動，行為，行動に区別し，“外的にとらえられた単なる運動（motion）と行為（action）の次元は区別される。動きが意味をもって主体と観察者の側に現れるのは，行為の次元にシフトするときである。行為の次元では動きは対象に向けての志向性をもつ。”とし，物理的な運動ではなく他者への志向性をもつものとして行為を位置づけた。また，行為に並行して言葉が使用されることを指摘し，“人の行為は出来事として語り記憶される”と述べ，“出来事としての行為”を「行動」（behabiour/praxis）と名づけた。非言語的な物理的運動は，他者への志向性をもって行為となり，出来事性を帯びることで行動となるのである。このように面接における身体の動きは，様々な次元で機能するものであり，特に「個」にとっての他者への志向性や出来事などの内的意味合いを含むものである。

本稿では，非言語的な動きが結びつく機能や心理療法の過程に主眼があるため，その内的な意味合いについて検討せねばならない。そのため本稿における動きは，先に述べた行為や行動の次元での動きの意味を含み，「個」の生きてきた関係性の文脈に関連があり，単なる客観的な動きではなく，「個」にとっての関係性をめぐる暗黙知が凝縮されたものとの意味合いを込めて〈 〉つきの〈動き〉とする。〈動き〉は，運動や行為，行動それぞれの次元において，時間的まとまりをもたせた後の概念ではなく，時間的に正に進みつつある瞬間的な身体の動きである。〈動き〉という現実を，主観的体験が言語化されたものである“心的現実”に対応させるならば，それは“身体的現実”ないし“場（トポス）的現実”とでも言われるような，自我意識の体験ではないが身体によって現実に表現されているものとも考えることが出来る。このような〈動き〉は，自我を越えた身体による直接的なメッセージである。

以上の議論から，本稿における〈動き〉を次のように定義する。非言語的な〈動き〉とは，人が現実の身体や場を媒介として表現する過程の，短時間的変化とそのありようである。〈動き〉はその人の心的体験や身体的体験，あるいは関係性をめぐる暗黙知が凝縮された形で瞬間の時間的変化として表現されるものであり，その人の生の物語と関連がある。また〈動き〉は心と身体をつなぐ次元にあり，運動や行為，行動として捉えられるものの瞬間的な有り様である。ゆえに〈動き〉を捉えることは，その人の生の体験を捉え，変化を促す心理臨床において重要なことである。このように非言語的な〈動き〉は，心身不可分な無意識的体験の現れであり，個としての人間の生き方，特に他者との関係性と密接に関わるものである。クライエントが面接にきてどのような体験をしているのか，セラピストが面接の何を記憶し記録するのか，二者の間で何が起こっているのか，などは，すべてクライエントとセラピストの関係性の上に成り

立つと言って良いが，〈動き〉は，その関係性の質を表現するだけでなく，その変化の兆しを表している。つまりセラピストが面接における〈動き〉を追うことは，心理療法のプロセスを，一瞬一瞬の関わりから把握するために非常に重要な営みなのである。

では，そのような基盤をもつ〈動き〉は，具体的にどのような心理的意味内容と結びつくのだろうか。これを考える時，〈動き〉の２つの側面である「言語／前言語的伝達活動に付随する〈動き〉」と「芸術表現活動に付随する〈動き〉」を区別する必要がある。なぜならこれらは質のことなる〈動き〉であると考えられるからである。それは，前者は意識的な言語／前言語活動の中で自然に（無意識に）身体に付随する受動的な〈動き〉であるのに対して，後者は初めから表現しようという意思のもとに，それも何かを伝えるためではなく，表現するために表現しようという能動的な意思がある行為の〈動き〉だからである。〈動き〉の次元に対して主体が如何に関わろうとするか，という基準で考えると，前者では，主体は言語的／前言語的伝達を目的としているのに対し，後者では，主体は表現することを目的としているのである。言語／前言語的活動がもともと他者への一方向的な伝達を目指すものである一方で，後者が表現を他者と共有する志向性を持つことは非常に大きな差異である。この違いが，如何に〈動き〉の解釈の違いへと繋がるのかについて，次節と次々節で述べる。

したがって，以下では言語／前言語的伝達活動の〈動き〉と，表現活動の〈動き〉のそれぞれについて，前者を伝達的〈動き〉，後者を表現的〈動き〉とし，その背景にある心理学的諸要因について考える。これらはいずれも多要因的なものであり，意識的，無意識的なものから，文化的，生得的なものまで含み込んだ〈動き〉であると考えられるが，紙面の関係から，本稿では面接の瞬間に凝縮されていると考えられる関係性や体験と結びつきが強いと考えられる部分に関して考察を加えることとする。

３．伝達的〈動き〉 –時間的感情の二重性–

言語／前言語的伝達活動における〈動き〉の背景にはどのような心理的意味があるだろうか。意識的な〈動き〉は，言語を伴うことが多く，言語的表象を説明するための大げさな音声的変化なり身振りである。その場での個の分化した意識的体験の意味合いが込められているという意味で，自我的な〈動き〉とも言える。一方で，自我に統制されない次元での行為における〈動き〉は，本人は自覚しておらず言語化されるものではないが瞬間的に身体化されている。ここでいう身体化は，一般的な防衛の失敗としての身体化ではなく，身体の〈動き〉に表れる個の体験としての身体化である。これを行為化と呼んでおくと，自我に統制されず言語化されないが，行為化された表現は，面接においてセラピストが捉えるべきクライエントの無意識のメッセージであると考えられる。なおStern（1985/1989）はフロイト流の伝統的な無意識と，手順知識としての非意識を区別しているが，ここでは論が煩雑になることを避けるために，差し当たって「自我的でない」という意味で同じ無意識として扱う。

〈動き〉が何かを伝達すると考える時，言語以前の乳児が他者に何をどのように伝達しようとするのかを取り上げることは妥当であると思う。Stern（1985/1989）は，言語獲得以前の乳児が対人関係を結ぶ際に用いる表現の手段としての“生気情動”ついて述べている。生気情動

は，怒りや悲しみなどのカテゴリ性の情動とは区別された，“ほとばしり”や“沸き起こり”などの“活性化輪郭”を表現する情動である。母子間の交流では，乳児が身振りや声などの非言語的な〈動き〉に表現するこの生気情動の“強さ・タイミング・形”に対して，母親が同じ非言語的〈動き〉によって無意識的に同調することがあり，Stern はこれを“情動調律”と呼んだ。これは乳児がおもちゃを手にもって「あーあー」と揺さぶり動かす仕草に対して，母親が同じ間合いや強度によって首を縦にふるような関わりであり，情動が沸き起こるリズムや強度という生気的特徴が共鳴しているのである。このことは人間の情緒的交流の原初的基盤を表現しており，大人においても見られるものである。ここでいう生気情動の活性化輪郭は，本論における〈動き〉の有り様である。〈動き〉が対人関係において共鳴することは，心的体験のレベルでは「情動」の共鳴であり，これは他者の心の存在を理解しようとする段階である乳児期における情緒的交流の一側面である。

身振りや音声，態度や姿勢の〈動き〉には，その瞬間の個の情動が関連していると言えそうである。ここで「情動」と言っているが，Jung（1921/1987）は「感情」と「情動」「気分」を区別した。Jung（1921）は“感情内容とは第一に自我と与えられた内容との間に生じる活動であり，しかもその内容に対して受け入れるか拒むか（「快」か「不快」か）という意味で，一定の価値を付与する活動である”とのべ，感情が物事の好き嫌いを判断すること，つまり主体にとって合理的な仕方で価値判断する機能であることを述べた。それに対して「情動 Emotion」は，“目に見えるほどの神経性身体現象を伴う点で感情からはっきり区別される”感情でありながら，生理的変化を伴って感じられる，むしろ感覚に近いような，より未分化で原始的なものである。また Jung が“感情内容は，その時の意識内容や感覚とは別個に，いわば孤立して，「気分」として現れることもある。”と述べるように，「気分 mood」は，より長い周期により変動する人間の感情を指している。伝達的な〈動き〉は，情動や気分などの勢いを含む感情とともに現れるといえる。言語獲得以前の乳児においては，〈動き〉による情動の表現は他者へ自分の体験を伝えるための主な手段である。Jung & Riklin（1904/1993）は情動状態の変化が〈動き〉に表れることを，連想実験によって心理学的に扱った。彼らは連想実験において，無意識のコンプレックスに触れる刺激語に対する反応時間が長くなることを指摘し，それに加えて「どもり」や「刺激語の反復」などの反応態度（コンプレックス指標）が現れることを示したのである。この「反応時間の遅れ」や「反応態度の変化」は〈動き〉そのものである。また Meier（1968/1996）は，Jung の連想実験に触れ，その 100 語の刺激語に対する反応時間の推移のグラフによって，“被験者の情動的状態も一目瞭然に示される”とし，“混乱を起こした情動の余韻”や，“混乱に伴う激しい揺らぎや大きな振幅”が，“その人の情動的状態にも一致する”と述べた。これはその人の反応態度から，情動の沸き起こりや持続・強度の突発的変化の有り様が〈動き〉に表現されると捉えたものである。このように、〈動き〉の表現は、無意識的なコンプレックスに触れられるような体験を通して情動が沸き起こることにより、その情動が活性化するに伴って身体を介して暗黙に表現されるものである。内的な情動の賦活およびその時間的推移の様子が、そのまま〈動き〉に現われているのである。無論、情動が沸き起こる時に必ず〈動き〉が身体的に表現されるわけではなく、それが身体的な動作に現われる度合いには個人差があると考えられ、それを見る事が出来るのが連想実験であったと言えよう。

これらから，機能としての「感情」を，自我的で，言語化可能なカテゴリとして分化されたものと捉え，「(生気) 情動」や「気分」を，時間的な幅は異なるが未分化な，自我を脅かす感情であると捉えるとき，伝達的な〈動き〉に表れるものの中心は情動や気分であり，沸き起こる情動や気分がコンプレックスなどの影響により自我に抱えられなくなった時，それらが〈動き〉として他者に伝えられると考えることが出来る。コンプレックスが，「個」にとっての“関係性をめぐる暗黙の知”や“他者と共に在るあり方”の形成に関与しており，言語的／非言語的伝達の背後に情動的な意味をもった〈動き〉が付与されて他者に伝えられる。そしてこれらの〈動き〉が付与されることは，行為化されることにもつながる。

また「情動」と「気分」という概念に示されるように，〈動き〉は時間性の幅を持っている。情動的な〈動き〉がコンプレックスに触れた瞬間に沸き起こる荒波であるとするなら，気分的な〈動き〉は，潮の満ち引きのようにゆるやかに上下するものであり，〈動き〉の突発的変化ではなく，〈動き〉を通してその人のその瞬間の全体的な雰囲気を形成するものであろう。このように伝達的な〈動き〉には，その背後に瞬間的な「情動」と持続的な「気分」という二重性があると考えられる。Pauleikhoff (1979/1982) は，“時間は，一方では (前後の) 連続を意味し，他方では細かく切り刻まれたものの連続にしかすぎない。それでもいくらかの瞬間の持続は，相互に排除しあうことはなく，むしろ時間の直線的な面と循環的な面がそうであるように，補いあうのである。”と述べ，その相補性を強調した。情動と気分は，互いに補い合う，時間的に考えられた感情の概念であろう。そしてこれらが二重に〈動き〉を形作る基盤を形成しているのである。

では伝達的な〈動き〉は，心理臨床においてどのように表れるものであろうか。セラピストがクライエントの情動や気分を知る手がかりは，言語／前言語的内容ではなく〈動き〉からではないだろうか。クライエントが「悲しい気分です」という時，それはクライエントによって意識的に知覚された体験の感情のカテゴリが知的に伝達されるのであり，その真の情動的意味は，「悲しい気分です」を如何なる〈動き〉で伝えたか，にかかっているだろう。セラピストはこの〈動き〉を何となく印象として受け取り言葉にするわけである。あるいは，言語的に伝えられた感情と，〈動き〉の印象がズレている場合は注目に値するかもしれない。クライエントが自分の感情を言葉に出来ないでいる所以は，葛藤や関係性から来るものと考えられるため，慎重に扱うべきであると考えられる。そのズレを生じているコンプレックスに目を向けることも重要であろう。また，実際には感情を体験していても，それが〈動き〉に現われない場合もある。これは，心理的には情動があっても，これが身体の次元で表出されない状態であると考えられ，このようなクライエントに対しセラピストは硬直した印象を受けるだろう。セラピストは，クライエントの〈動き〉への印象から，クライエントの自我と感情の折りあいの付け方や，その場における瞬間の関係性，あるいはクライエントの身体性へと関心を向けることが出来るのである。

伝達的〈動き〉の背後にある情動や気分は，自我を脅かすものとして無意識からやってくるものであり，それが身体を通して，外界，他者（セラピスト）へと自ずから伝達される。これはコンプレックスに触れて動き出した無意識のエネルギーが自我と衝突し，身体の〈動き〉として流れ出たとも考えられるだろう。これに対して，表現的な〈動き〉は次元が異なる。なぜ

ならそれは,「表現しよう」という自我意識にも支えられ，いわば能動的な行為としての表現に付随する〈動き〉だからである。

４．表現的な〈動き〉　−全身体感覚と関係性−

場や関係における感情を身体に乗せて伝える伝達的な〈動き〉について述べてきたが，これとは質の異なる〈動き〉として表現的な〈動き〉がある。先に述べたように，表現的な〈動き〉は表現することを志向する営みにおける〈動き〉である。ここでいう表現とは，描画や箱庭などの非言語的な芸術表現過程を指している。表現的な〈動き〉は，伝達的な〈動き〉と類似した感情的なものを伝える部分も含まれるが，表現が能動的な行為であるという意味で次元が異なる。伝達的な〈動き〉が，内界からやってくるもの，自我を脅かすものへの身体的補償であるのに対し，表現的な〈動き〉は，むしろ内界と積極的に関係をもち，自我の統制が緩んだ状態における内界の開示としての〈動き〉である。この意味で，表現的な〈動き〉は情動とは異なる内的意味を伝えるともいえるだろう。

バウムテストで著名な Koch,K.は，もともと筆跡学の研究者であり，バウムの解釈においてもその筆跡や動態を重視した。Koch（1957/2010）が，“描画に意図せず入り込む独自なもの，個人的なものが表現であり，すなわち，内的なものを意味あるものとして具体的に示すものである。表現とは，描画に何が描かれているかということよりも，描画がどのように描かれているかということと関係がある”と述べるように，表現には個人の内的なものを表す意味が含まれていると同時に，表現過程こそ重要である。また Bolander（1977/1999）は，表現的な〈動き〉を分析することは，“筆跡学，身振り，歩き方，顔面表情，発声様式，あらゆる種類のアートによる表現，などの技法をふくむ個人の行動様式を探求する方法”であり，客観的行動に関心があるように見えるが，“描画は内的知覚の永続的記録であり，投影をふくんでいる”という言い方で，表現技法つまり〈動き〉に投影的要素があることを述べている。表現的な〈動き〉は,個人の内的知覚や身体感覚を独特の行動様式に投影した結果であると捉えることができる。主体にとって表現的な〈動き〉にはどのような意味があるのだろうか。森岡（1995）は，“子どもがあるものの形をなぞり，描画の線で表すとき，その描線は対象物を把握したという身体感覚とつながっています。”と言い，子どもは描画行為において，見たものを再現するのではなくて，描画時の“体感そのものを楽しんでいる”のであり，“自由に線を走らせる，まさに身体のレベルでの描画行為それ自体に慰めがある”のである。また青木（1986）は，バウムテストを見る際の態度として，“バウムテストは，描線の分析を重視している。描線は人間の運動の，直接的には手であるが,さらに全身的な生きる律動を含めた総合的運動の固定されたものである。”と述べ，描画における表現的な〈動き〉が，全身的な律動の表現であることを示唆している。

ここで本稿で明確にしていなかった「表現」という語に立ち返って，心理療法の中で行われる表現について考えると，山中（1999,2003）は，芸術的意味合いを取り除き，美的価値に関連がないという意味で，「芸術療法」を「表現療法」と表記し直し，「芸術」と「表現」を区別している。岸本（2007）も，“事例検討会やスーパーヴィジョンにおいて，クライエントの描いたバウム（木の絵）を出して，これはどんな意味がありますかと解釈を求める場合，そしてこれ

これの解釈が考えられますと答える場合，彼らはバウムを「表現」としてよりもむしろ「芸術」として見ている。（中略）でき上がった作品にだけ関心を示すような批評的な視線の前では，描くことは苦痛となるのではないだろうか。描画が生まれてくるプロセスに関心を払い，丁寧にみていく。そのような，プロセスを共にするという姿勢がなければ，描くことが治療的にはなりにくい。”と述べた。プロセスを含む表現的な〈動き〉は，心理療法における表現活動が治療的に働くために欠くことのできない視点であることが強調されている。「表現」という語には，〈動き〉の意味合いが先験的に含まれる。また青木（1986）は，バウムテストを見るセラピストの態度について“レコード針が溝をたどって,その微細な振動によって音楽を奏でるように，この視覚の働きから，１本の描線のちょっとした弾み，ちょっとした躇いを再現し，視覚的共感からより体感的共感へと深めていくのである。”と表現している。セラピストがただ眺めているだけではなくて，描かれる〈動き〉のプロセスに全身的に関与しながら観察を行うことが，治療的に働くと考えられる。またこの視点は，芸術表現療法全般（絵画療法，音楽療法，ダンス／ムーブメントセラピー，サイコドラマ，詩歌療法など）に有用であるように思う。McNiff（1981/2010）が，“あらゆる芸術活動の根源には，体の動きがあります。”と述べるように，芸術表現療法の治療機序の１つには，クライエントの〈動き〉とセラピストの身体的共感という関与があると考えられる。表現的な〈動き〉のプロセスをなぞることは，クライエントの生の体験に添うことにもつながる営みであると考えられよう。

上記のように，表現的な〈動き〉は，クライエントの内的知覚や身体感覚などの生きる“律動”を凝縮し，行動様式として時間的・空間的に表現しているものであり，その表出行為自体に慰めがあるが，それはその〈動き〉として表れる体験を見守り，身体で共に感覚する他者の積極的な関与があってこそ治療的に働くものである。

５．２つの〈動き〉の結びつきとリズム

（１）２つの〈動き〉　伝達的な〈動き〉が，統制できない，無意識からやってくる情動や気分を受動的に身体で抱えると共に，他者へと伝える〈動き〉である一方で，表現的な〈動き〉は能動的に表現する過程において，個人の身体感覚や内的感覚が凝縮された形で表現されるものであることを述べてきた。心理療法においては，伝達的な〈動き〉をクライエントの感情状態として知り，また表現的な〈動き〉は全身体的になぞることに意味があることも述べた。

表現的な〈動き〉であるような描画表現でも，例えば怒りに任せてぐるぐると描かれたなぐり描きの激しい〈動き〉は，伝達的な〈動き〉に近いものであろうし，これらは明確な区別があるのではなくて，表現的な〈動き〉は伝達的な意図も含みうるだろう。また伝達的な〈動き〉も表現的な〈動き〉も，その瞬間には無意識的に行われることがほとんどだと考えられるが，知覚できるという意味で，自らの〈動き〉に対して認識することは可能である。しかしながら，あくまでそれは認識であって，自らの〈動き〉を自我的に統制できない，関係のなかでそれを統制できないため，〈動き〉の本質は無意識的である。わかっていてもやってしまうところに，〈動き〉の難しさがあり，また個の内面を露にする意味もあるだろう。明確な境界があるわけではないが，差し当たって心身二元論的に考えるならば，伝達的〈動き〉はより感情という自

我的，心理的機制（心理性）に関連があり，表現的〈動き〉は身体感覚や内的体験といった身体的機制（身体性）に関連があるようだ。そして，伝達においても表現においても，その〈動き〉に見られる“生きる律動”とそれに対する“他者の関与”が，心理療法においては特に重要な要素であろう。

（2）〈動き〉とリズム　ここで２つの〈動き〉を結びつける要素として，青木（1986）の“生の律動”という視点は興味深い。伝達的な〈動き〉の中心である感情や情動についての議論は膨大なため，ここでは“生の律動”との関連で述べるが，情動が起こることは，心拍や呼吸，脈拍の変化といった生理的な感覚，しかも全身体に関わる内蔵感覚と結びつきの強いものである。まさに生命維持のための律動を変化させることによって，情動は〈動き〉となって表れるのである。一方，表現的な〈動き〉が内包する内的知覚や身体感覚は，分化した五感の感覚ではなく，全身体による体性感覚であるとも言える。中村（2000）は，五感を中心とした諸感覚の体性感覚的統合を行う共通感覚について,“共通感覚はリズムの感覚である”と述べるように，五感で感じられるのでない，身体の体性感覚，直観的な第六感のような感覚を共通感覚と位置づけ，リズム感との結びつきを見出している。ここに２つの〈動き〉を結びつける全身体的な生の律動やリズムといったことが問題になる。伝達的な〈動き〉も，表現的な〈動き〉にも，時間的空間的態勢としてのリズムがあるのである。

（3）リズムの生命性　では２つの〈動き〉に共通する人間のリズムとはいかなる営為であろうか。人間のリズムの営みを現象学的に捉えた Klages（1923/1971）は，生命現象としてのリズムと，リズムを意識する人間の営みとしての拍子付け（Taktung）を区別し，“リズムは―生物として，もちろん人間も関与している―生命現象であり，拍子はそれにたいして人間のなすはたらきである。リズムは，拍子が完全に欠けていても，きわめて完成された形であらわれうるが，拍子はそれにたいしてリズムの共働なくしてあらわれえない。”と述べた。睡眠時と覚醒時の対比で述べれば，リズムは睡眠時も活動する生命的な営みであるのに対し，タクトは，覚醒時に時計の針の音の刻みやメトロノームの拍子打ちを聞き取り体感する人間の意識的体験を表している。情動の賦活や身体感覚の凝縮として表される〈動き〉は，実は生命的であるリズムが心身的次元で動いている結果であり，共に“生の律動”の現れであると捉えることが出来るのではないか。さらにいうと，伝達的な〈動き〉にはリズムがより心的次元で，表現的な〈動き〉にはリズムがより身体的次元で機能しているのではないかと考えられる。Pauleikhoff（1979/1982）は、“生命リズムは、時間性という架橋によって、精神的領域と生物的領域を互いに結びつける。機能的疾患における生命リズムの障害は、したがって生命の両面を冒し、時間の流れに沿って、生活史的変化から生物学的変化の方向に進む。リズムの中に、人間の生命の原点が隠されており、肉体と心の接点がある。”と述べ、リズムは時間性をもつことによって、人間の精神性と生物性、つまり心と身体を結びつけると考えた。ここでいう精神性と生物性とは，本論でいう伝達的な〈動き〉の「情動」と，表現的な〈動き〉の「身体感覚」に対応するものであり，〈動き〉の根源としてのリズムは，このように心と身体のどちらにも結びつく第三のものであることが示唆される。

（4）リズムの想像性　リズムが生命的であるという主張は，リズムが動物的であるようなニュアンスを含んでいるが，むしろリズムは非常に人間的な営みである。Leroi-Gourhan

（1964/2012）は，“音楽や演劇などのリズムは想像力があり，もともとの生物的なリズムから人間的なリズムへの動きに位置づけられる想像力のあるリズム”であると述べる。〈動き〉のリズムは，人間が人間らしくなるための潜在的な想像力を持っているのである。美学者の山下（2012）は，Gisèle,Brelet のリズム論を参照しつつ“リズムのなかには，枠組みを自由に更新する動きと，それとは逆に，固定した形式におさまろうとする動きが同時にあらわれる”という両価的性質を指摘した。さらに“リズムとは，自己のなかに別種の存在を呼び込もうとするひとつの行為のこと”であり，“生命的なものだけによって，リズムを理解することはできない。みずから行為を引き起こす精神の能動性の観点からこそ，リズムは考察されねばならない”とし，“生命はそのままではみずからのリズムに気づくことはないし，リズミカルな形式にたどり着くこともない。精神により芸術的思考をおこなうことではじめて，生命のうちにリズミカルなものは植えつけられるし，あるいは，生命はみずからがリズム的であるということを認識する。”という。つまりリズムを認識する精神の働きがあるからこそ，リズムは自己に別種の存在を呼び込むという想像性を発揮するのであり，それは自己の深奥にある生命性に宿るもの――心理臨床においては自己治癒力と呼べるかもしれないもの――を発揮するであろう。リズムをリズムとして認識する人間的な心的体験があって初めて，リズムは生命的になりうるのである。

Barthes（1982/1984）は，“文明が発明されるずっと以前に，さらには，洞窟画が描かれるずっと以前に，おそらく根本的に人間と動物とを区別する何事かが生じたのだ。それはリズムを意図的に繰り返すことである。”と述べ，“最初のリズミカルな表象が最初の人間の住居の出現と同時期であること思わせる証拠”があると述べた。人間が人間となる時代にリズミカルな表象が生まれたという指摘は興味深い。飛躍になるかもしれないが，神経症を生んだ近代社会が，人間を人間から遠ざけているとすれば，リズムはむしろ人間が原初の人間的存在に回帰することに関与する可能性があるのではないだろうか。機械的に動き，速さを志向する現代人はむしろ，自然の一部分としての人間のあり方を見直す必要があるのではないか。

６．おわりに　－〈動き〉へのアプローチの意義と限界－

本稿では，心理臨床において，とりわけ事例検討において取り上げられ難い非言語的な〈動き〉に関心を向け，その定義や心理学的，心理療法的な意味の検討を試みた。人間存在の様々な側面に付着する〈動き〉は，身体を媒介とし，その場の関係性や過去の“関係性をめぐる暗黙の知”に支えられた“他者と共に在るあり方”が基盤となっている。また，客観的な行動と捉えられがちな〈動き〉は心の内的な意味を持ち，「身体的現実」を直接他者に伝えられる手段であった。さらに〈動き〉は伝達的なものと表現的なものがある。前者は情動や気分を含む未分化な感情の沸き起こりに従って，自我に統制され得ないものが身体を介して他者に流れていくものであり，セラピストにとってはクライエントの言語内容と〈動き〉への印象に注意を向けることが，アセスメントに役立つ可能性がある。一方で後者は，内的知覚や身体感覚の流動的なものを投影し，その表現行為自体に，未分化な身体感覚を補償する慰めがあり，セラピストはその〈動き〉を全身体的になぞりながら，クライエントの身体感覚や体験を共にすることが重要であると指摘された。そして，それら２つの〈動き〉には，共に“生きた律動”の側面

があり，生理的な生命維持活動にも関連した体性感覚や共通感覚で感じられるリズムをその根源に持っていた。生命的であるリズムは，心身を結びつける第三のものであり，そこには人間を人間たらしめる想像性が潜在していると考えられた。

〈動き〉はまだまだ多様でわからない存在であり，まるで心理療法で何が起こっているのかをそのまま示しているかのうようである。セラピストが〈動き〉を具体的に理解しようとするためには，まずはクライエントの〈動き〉を可能な限り知覚し，感受することが必要であろう。もっとも，西澤（2008）が“面接中において，今口調が速くなっている，ゆったりした時間が流れている，切迫した空気が迫ってくるなどの体験の側面に注目してしまいすぎると，かえってその自然な流れを壊してしまったり，あるいは語られた内容への集中を失ってしまったりすることもあるし，むしろ意識的にはクライエントの語りの内容に集中しているほうが，トーンや響きが意味あるものとして感じられてくることもある。”と述べるように，〈動き〉ばかりに注目しすぎて，その他が疎かになることは避けねばならない。その上で〈動き〉とクライエントの人格や病理との関連を検討していくことが今後求められるだろう。〈動き〉の瞬間に焦点を当てた新しい事例検討も必要であろうが，その際には，必ず〈動き〉を主客両面からアプローチすることが重要であろう。

〈動き〉はどんなに言語化しても共有し得ない掴みづらさを持っている。また，クライエント，セラピストを含めて，誰も意識化できないという側面も持っている。ゆえに第三者的な記述になっており，具体性に乏しい議論が展開されたように思うが，〈動き〉にアプローチする足がかりになると思われる。〈動き〉は心理臨床の本質に関わる一方で，研究はまだまだ少ないため，今後も積極的に議論されることを望んでいる。

［引用文献］

青木健次（1986）バウムテスト,家族画研究会編 臨床描画研究Ⅰ，特集 描画テストの読み方，金剛出版.

Barthes, Roland.(1982)*L' obvie et L' obtus*, Editions du Seuil, Paris.(沢崎浩平 訳(1984)『第三の意味』 みすず書房)

Bolander, K. (1977) *Assessing Personality Through Tree Drawing*, Basic Books Inc. (高橋依子 訳 (1999)『樹木画によるパーソナリティの理解』ナカニシヤ出版)

BCPSG: The Boston Change Process Study Group(2010) *Change in Psychotherapy: A Unifying Paradigm*.W.W.Norton & Company. (丸田俊彦 訳 (2011)『解釈を越えて サイコセラピーにおける治療的変化プロセス』岩崎学術出版社)

Jung, C. G. (1921) *Psychologische Typen*. Zürich: Rasher Verlag. (林道義 訳 (1987)『タイプ論』みすず書房)

Jung, C. G. & Riklin, F. (1904) Experimentelle Untersuchungen ünber Assoziationen Gesunder.Journal für Psychologie und Neurologie Ⅲ(Leipzig), pp.55-83, 145-164, 193-215, 283-308, und Ⅳ(Leipzig), pp.24-67. (高尾浩幸 訳 (1993) 第一部 正常者の連想についての実験的研究, *『診断学的連想研究』*, pp.9-206.)

神田橋條治（1990）精神療法面接のコツ．岩崎学術出版社.

岸本寛史（2007）表現としての描画，*臨床心理学*，7(2)，pp.151-157.

Klages, L.（1923）*Vom Wesen Des Rhythmus*, Verlag Gropengiesser, Zürich und Leipzig.（杉浦實 訳 1971 『リズムの本質』 みすず書房）

Koch, K.(1957) *Der Baumtest. 3 Auflage*: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. Bern: Verlag Hans Huber.（岸本寛史・中島ナオミ・宮崎忠男 訳（2010）『バウムテスト［第３版］心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究』、誠信書房）

Leroi-Gourhan, A.（1964）Le Geste et la parole. La memoire et les rythmes, tome2, Editions Albin Michel, Paris.（荒木亨 訳（2012）『身ぶりと言葉』ちくま学芸文庫）

McNiff, S.（1981）*The Arts and Psychotherapy*, Charles C. Thomas, Publisher, Ltd.（小野京子 訳（2010）『芸術と心理療法　創造と実演から表現アートセラピーへ』誠信書房）

Meier, C. A.(1968) Lehrbuch Der Komplexen Psychologie C.G.Jung: *Die Empirie des Unbewußten*（Band Ⅰ）, Walter-Verlag AG.（河合隼雄 監修 河合俊雄・森谷寛之 訳（1996）『ユング心理学概説１　無意識の現れ』創元社）

森岡正芳（1995）こころの生態学　臨床人間科学のすすめ　朱鷺書房

森岡正芳（2004）「行動」概念の再構成　−心理臨床場面における身体の可能性−，*臨床心理学*，4(3)，pp.318-322.

中村雄二郎（2000）共通感覚論．岩波現代文庫.

西澤伸太郎（2008）関係性におけるイメージ体験としての「響き」，藤原勝紀・皆藤章・田中康裕 編（2008）京大心理臨床シリーズ第６巻『心理臨床における臨床イメージ体験』 創元社，pp.443-452.

Pauleikhoff, B.（1979）*Person und Zeit*, Alfred Huthig Verlag GmbH Heidelberg.（曽根啓一 訳（1982）『人と時間』星和書店）

Stern, D. N.（1985）*The Interpersonal World of the Infant*. A view from psychoanalysis and developmental psychology. New York: Basic Books.（小此木圭吾・丸田俊彦 監訳（1989）『乳児の対人世界 理論編』岩崎学術出版社）

Stern, D. N.（2004）*The Present Moment in Psychotherapy and Everyday Life*. W.W.Norton & Company.（奥寺崇 監訳　津島豊美 訳（2007）『プレゼントモーメント　精神療法と日常生活における現在の瞬間』岩崎学術出版社）

Sullivan, H. S.（1954）*The Psychiatric Interview*.，W.W.Norton & Company Inc.，New York.（中井久夫・松川周二・秋山剛・宮崎隆吉・野口昌也・山口直彦　共訳（1986）『精神医学的面接』みすず書房）

山中康裕（1999）心理療法と表現療法．金剛出版.

山中康裕（2003）表現療法．ミネルヴァ書房.

山下尚一（2012）ジゼール・ブルレ研究　-音楽的時間・身体・リズム−．ナカニシヤ出版.

（臨床心理実践学講座　博士後期課程１回生）

（受稿 2013 年 9 月 2 日、改稿 2013 年 11 月 28 日、受理 2014 年 1 月 16 日）

The Meanings of Nonverbal “Movement” in Clinical Psychology

SATOH Utsuru

This study aims to examine the meanings of nonverbal “movement” in clinical psychology, which is a problem not focused on in case study. The author attempts to define the meanings of “movement” in the clinical, psychological, and psychotherapeutic context. This “movement’” involving various perspectives on human existence, is based on “implicit relational knowing” or the relationship between therapist and client in that session. We tend to understand “movement” as a human objective behavior, but “movement” includes the inner meanings of the human mind and expresses one’s physical reality directly. In addition, the author distinguishes transmitting “movement” from expressive “movement.” The former transmits effects or moods, which the human ego cannot control, to others through the body. On the other hand, the latter projects the human’s physical, inner senses. The two “movements” have a primitive living rhythm, which humans feel by somatic sensations or common sense. This rhythm is concerned with life-sustaining activities. Natural life rhythm combines the physical part with the mental part, and potentially has the imaginative functions that make human beings humane.